

月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.96

『英雄伝説 暁の軌跡』

ファルコムニュース

『軌跡』15周年イヤーを祝して
過去の『軌跡』原作の
ファルコムBOOKSを毎号お届け！

英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～

レーヴェの過去を聞いて エステルが出した答えとは

英雄伝説 空の軌跡SC
～絆の在り処～



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

3 目次

4 晴着に巫女服と晴れやかな1月！
『英雄伝説 暁の軌跡』

7 英雄伝説 空の軌跡SC
～絆の在り処～
啄木鳥しんき

28 ファルコムニュース

46 『軌跡』シリーズ15周年！
『軌跡』原作のファルコムBOOKSをもう一度！
英雄伝説 閃の軌跡
～メンタルクロスリンク～
著：草薙アキ　イラスト：YahaKo

76 新久保だいすけイラストメッセージ

1月の新/衣装替えキャラクターをチェック！



アルフィン・ライゼ・アルノール

エレボニア帝国の皇女で、その可憐な佇まいから帝国民から"帝国の至宝"とも謳われるアルフィンが暁の軌跡に参戦！ ちなみにオリビエとは異母兄妹の関係だ。

晴着・ミレイユ

こちらもお正月ということで、晴着衣装を身にまとったミレイユが登場。金髪緑眼の風貌と"和"を代表する衣装のギャップが、さらに彼女の魅力を引き出している。

吟遊詩人・オリビエ

オリビエが『空の軌跡』シリーズからおなじみの、漂泊の詩人にして不世出の天才演奏家オリビエ・レンハイムの衣装を着た姿で登場。これこそがオリビエの真（？）の姿だ。

巫女服・アネラス

新年を迎える１月ということで、アネラスが巫女服衣装に。各所に用意されたスリットが、セクシーかつキュートな雰囲気を醸し出している。

2月の新規衣装替えキャラクターは？

※画像は開発中のものです。　※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

THE LEGEND OF HEROES 暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。１月はメインストーリー第６章第３弾が実装！ さらにはエレボニア帝国の至宝・アルフィン皇女が参戦！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/

公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

メインストーリー 第6章第3弾 が実装！

レミフェリアに滞在して３日目の朝。試験班はこれまでに入手した情報を精査するためモンレイン支部に集合していた。バラバラだった手がかりが繋がり始め、事件は解決に向かおうとした矢先、《戦争卿》の新たな刺客がナハト達の前に立ち塞がる！











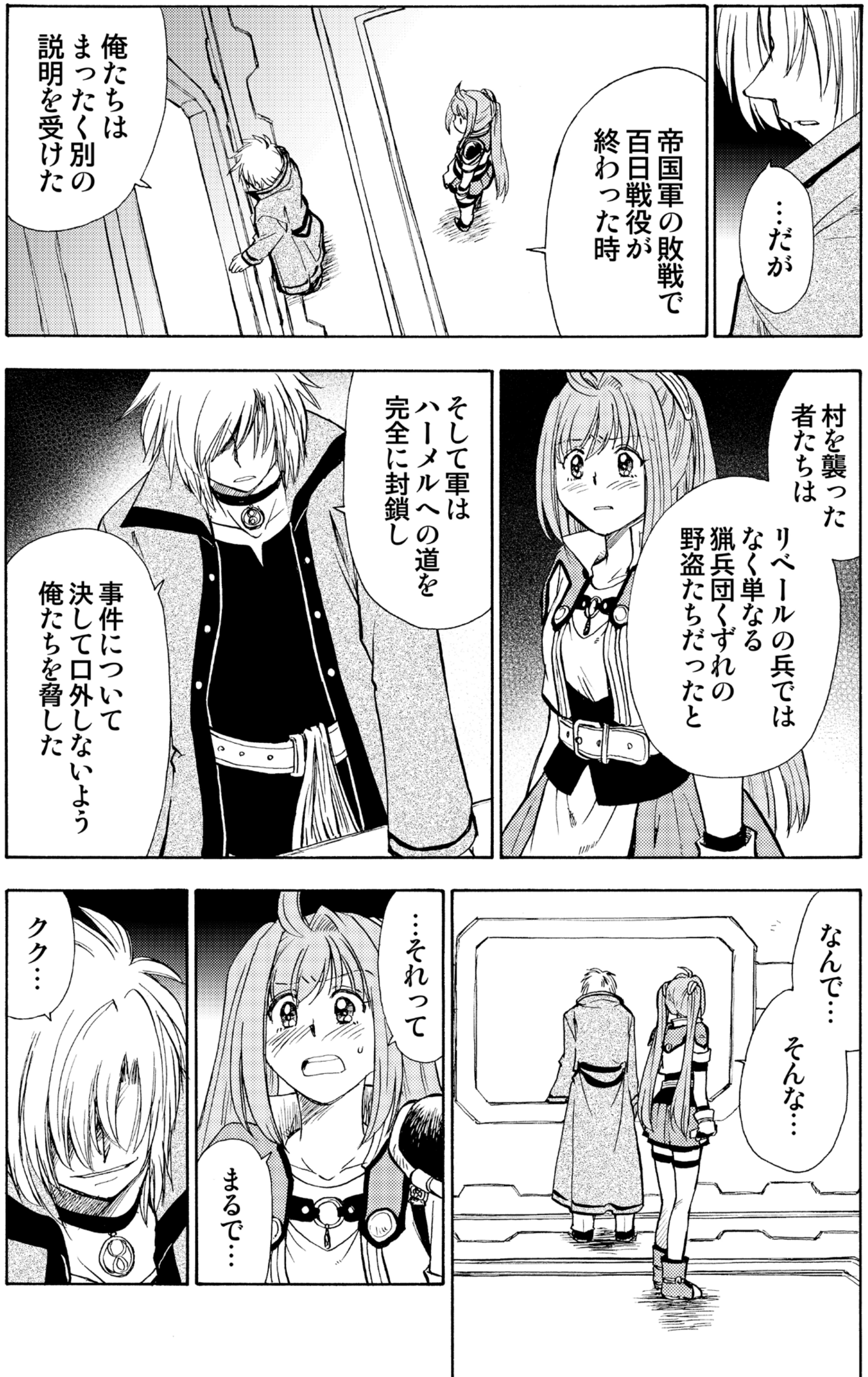


…なんで…
どうして…
そんなことに…
空の軌跡 SC
～絆の在り処～
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム
村を襲った男たちは
リベール製の導力銃を持っていた



『英雄伝説 閃の軌跡』のアリサたちが魔法少女に!?
脚本家・山下憲一（TV アニメ『みんな集まれ！ファルコム学園』）と漫画家・さがら梨々（コミック『閃の軌跡』）の強力タッグが贈るシナリオブックが登場！　平穏な日常に突如現れた怪物。その時、アリサのキーホルダーが不思議な光に包まれて……!?
あなたにお届け！
愛と希望の流れ星！
魔法少女
まじかる★アリサ
決定稿
著：山下憲一
イラスト：さがら梨々
原作：日本ファルコム
好評発売中！
判型：A5正寸／ページ数：160／定価：1,300円（税別）／ISBN978-4-8021-3131-5
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©KENICHI YAMASHITA,RIRI SAGARA 2018 ©2018 FIELD-Y
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら www.field-y.co.jp/falcombooks

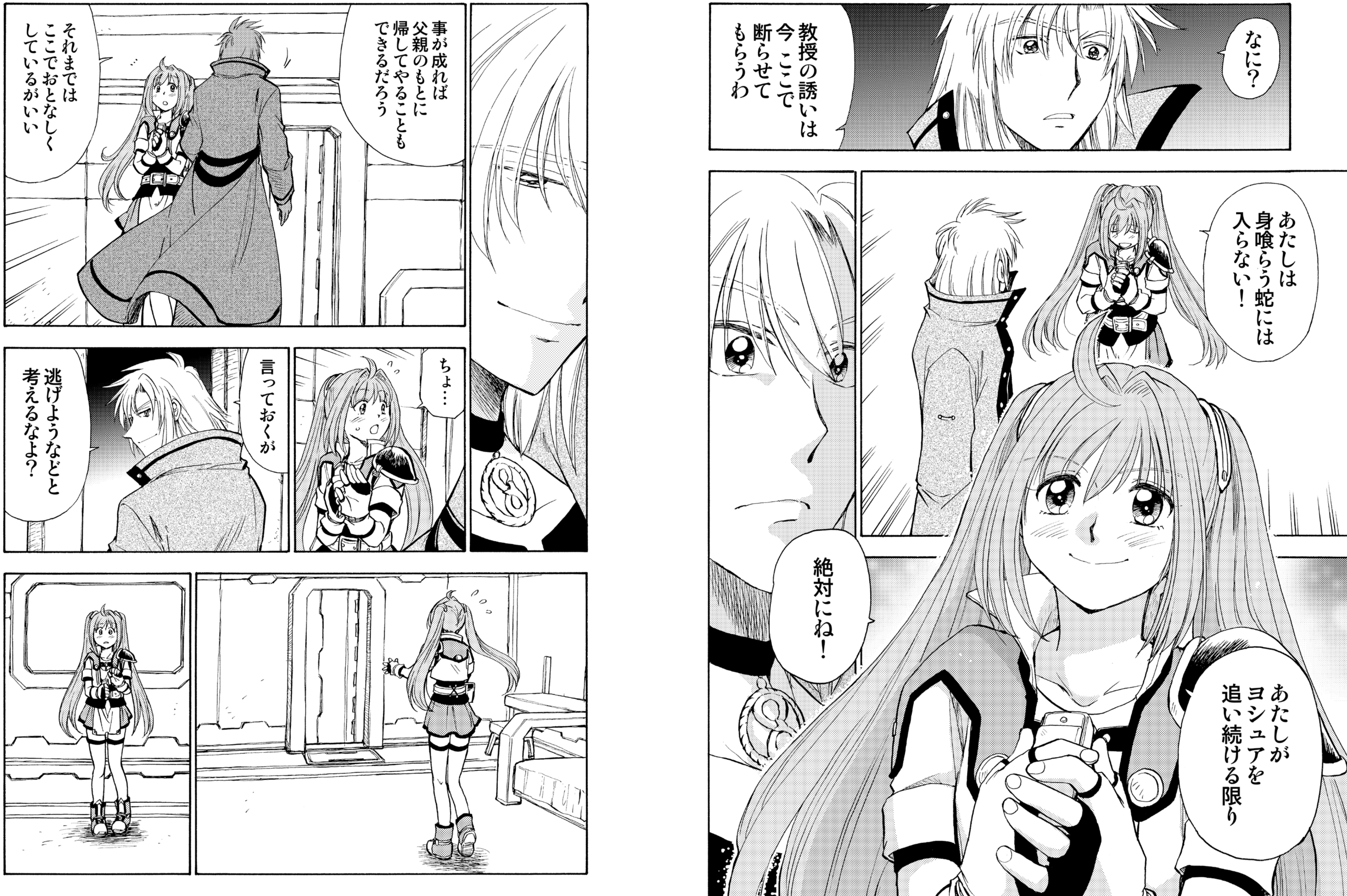

え!?
王国製の銃を携えた襲撃者によって起こされた帝国領内での惨劇…
それは帝国が侵略戦争を始める格好の口実だった
その直後エレボニア帝国はリベール王国に侵攻を開始する
10年前の戦争…百日戦役はこうして始まったんだ
そんな…!
それは本当にリベールの兵隊だったの!?
俺たちは帝国軍からそう聞かされていた

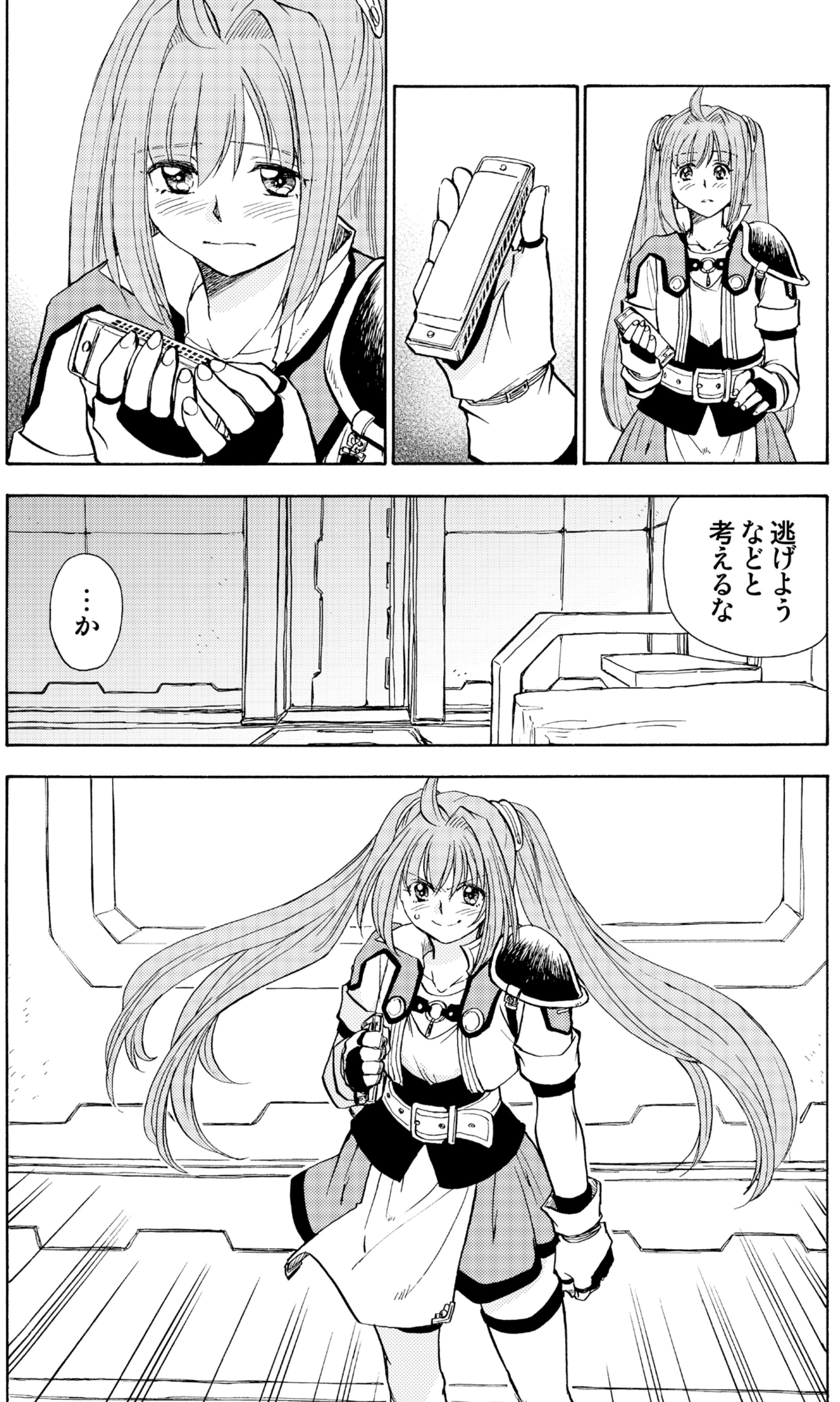

…だが
帝国軍の敗戦で百日戦役が終わった時
俺たちはまったく別の説明を受けた
村を襲った者たちは
リベールの兵ではなく単なる猟兵団くずれの野盗たちだったと
そして軍はハーメルへの道を完全に封鎖し
事件について決して口外しないよう俺たちを脅した
なんで…
そんな…
…それって
まるで…
クク…


すべては帝国が企てた
リベールを侵略するためのシナリオだったというわけだ
自国の何の罪もない村人たちを惨殺し
他国に戦争をしかけるためだけに
しかし自作自演が露見するや否や
なりふりかまわず己の汚行をなかった事にした
これが
「ハーメルの悲劇」の真相だ
け…
剣帝…


…そんな日々の中で
ヨシュアの心は完全に壊れてしまった
言葉を失い表情も消え
ハーモニカ以外の一切に興味をなくし
ただただ痩せ衰えていくだけだった
そんなヨシュアと俺の前に
あのワイスマンが現れて…
俺は彼にヨシュアを預けて身喰らう蛇に身を投じた
そしてその2年後
ヨシュアも俺と同じ道を辿ることになる


これが
闇だ
エステル・
ブライト
おまえと
ヨシュアの間に
どんな断絶が
あるのか
理解
できたか?
…うん
あの…
剣帝…
ありがとう
ヨシュアの過去を
教えてくれて
あなたにとっても
…つらい過去を
ちゃんと
話してくれて…
…おかげで
やっと…
すべてが
見えてきた
気がする


事が成れば父親のもとに帰してやることもできるだろう
それまではここでおとなしくしているがいい
ちょ…
言っておくが
逃げようなどと考えるなよ?
なに？
教授の誘いは今ここで断らせてもらうわ
あたしは身喰らう蛇には入らない！
あたしがヨシュアを追い続ける限り
絶対にね！


逃げようなどと考えるな
…か

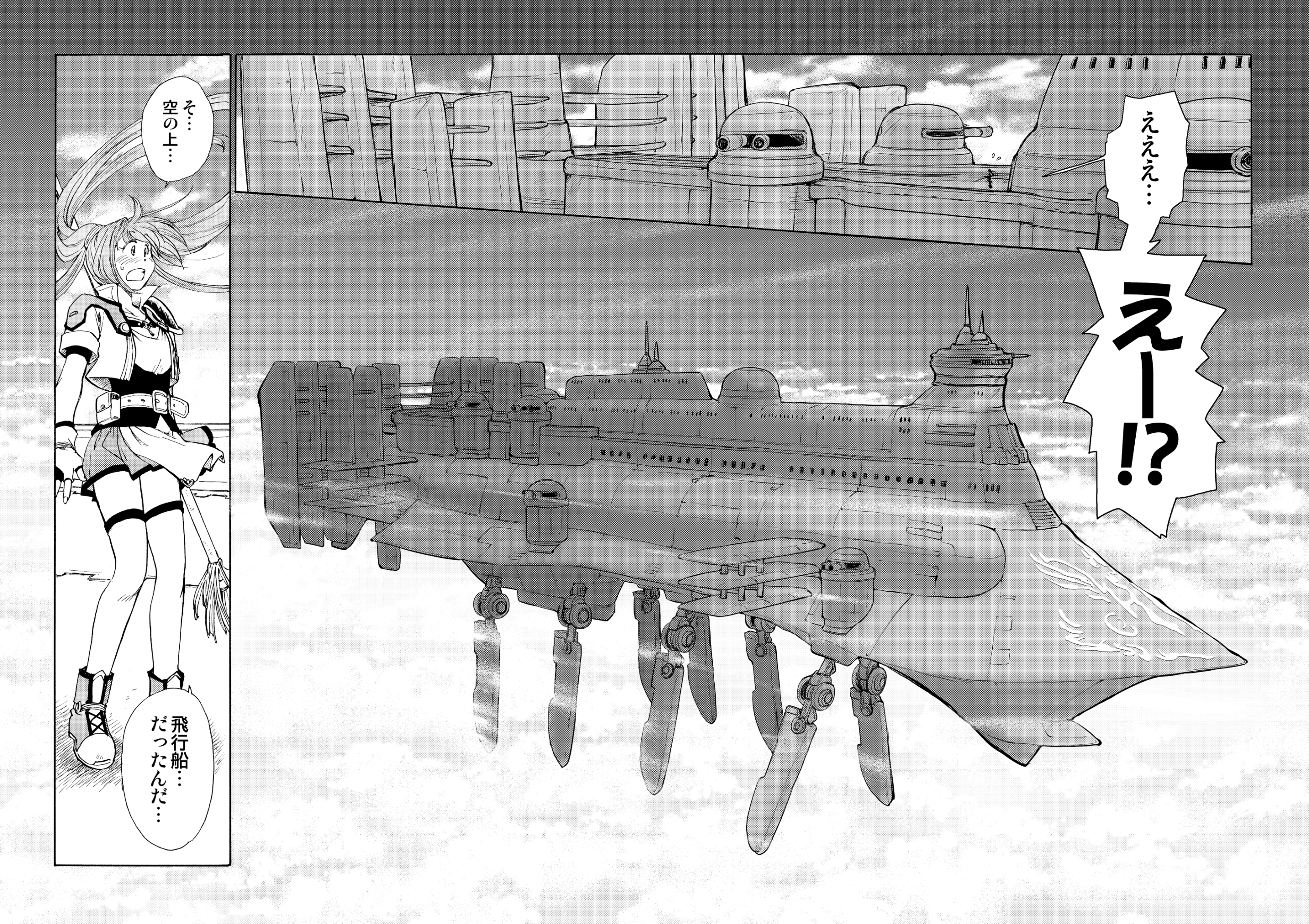

ぐあしゃ
今の音…
まさか窓から逃げようとしてるんじゃ…
ばっ馬鹿なことを!
ここをどこだと思って…

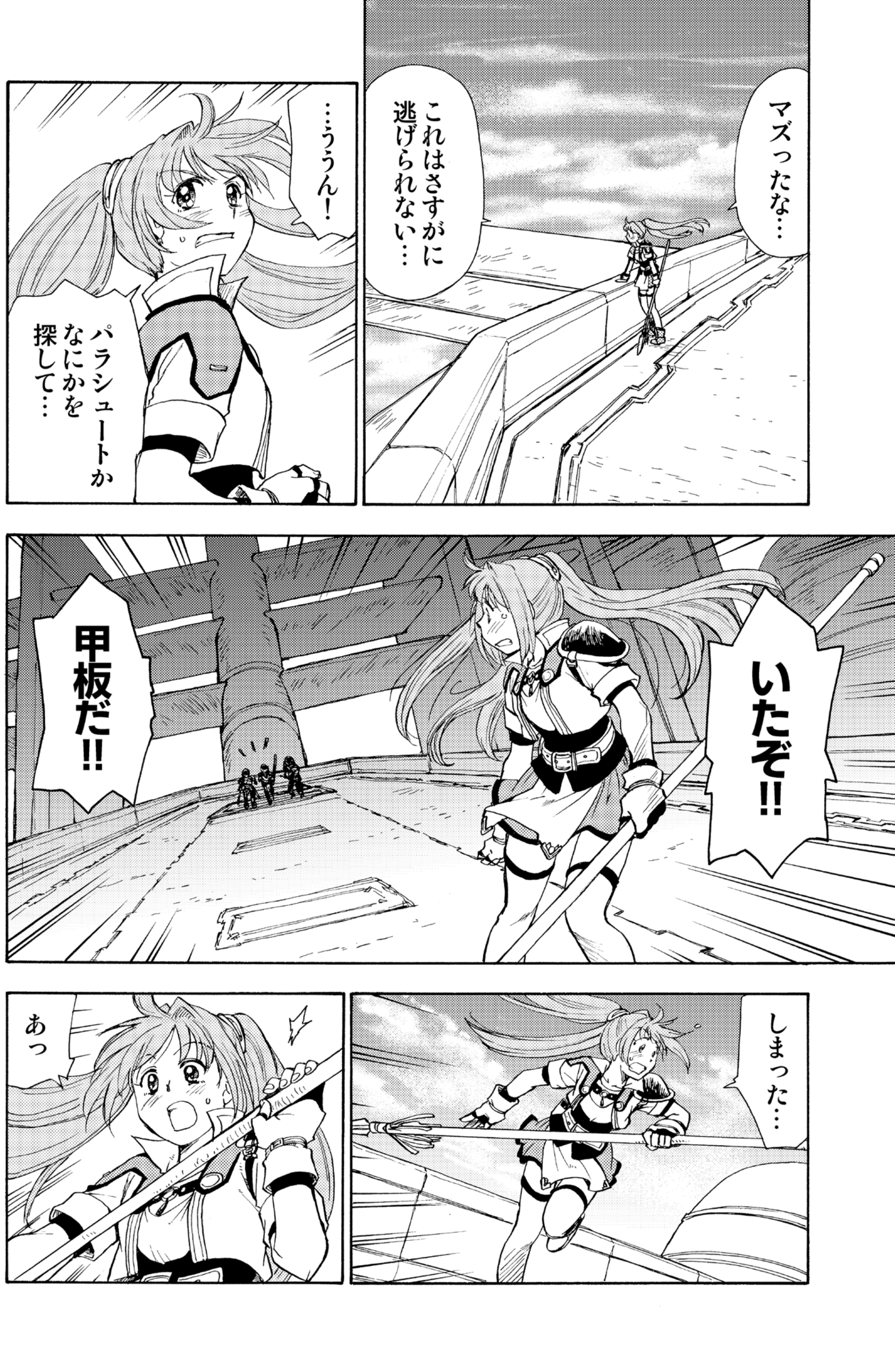

ばごーん!
せいっ!!
きっ 貴様…!
ぱし!
はーっ!!


ドオッ
よし!
あたしは 諦めない
もう一度 ヨシュアに 会うまでは
絶対に
諦めない んだから!


この建物って
敷地は広そうだけど
高さは二・三階建って
感じなのよね
だったら
出口を探して
動き回るよりも
いっそ

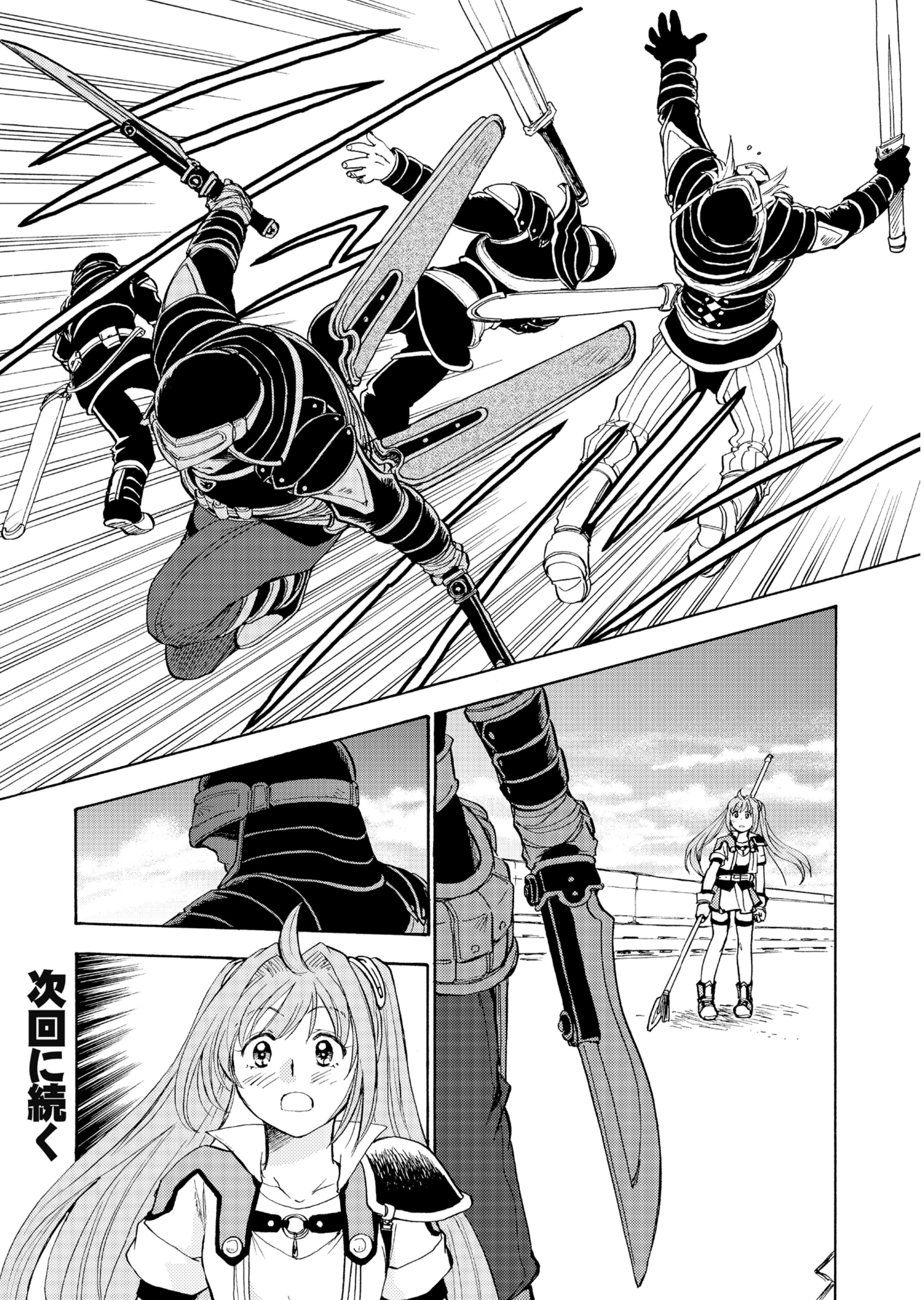

上へ
屋上から
外に出れば
ここから
脱出
できるかも
わ!?
え…
ええ…


えええ…
えー!?
そ…空の上…
飛行船…だったんだ…


マズったな…
これはさすがに逃げられない…
…うぅん！
パラシュートかなにかを探して…
いたぞ!!
甲板だ!!
しまった…
あっ


く…っ
抵抗しても無駄だ！
おとなしく投降するがいい！
ふん…だ！
雑魚になんか負けるもんですか！
さあ！
かかってきなさいよ!!


まったく
あいかわらず無鉄砲なんだから
へ…


次回に続く

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

「閃の軌跡Ⅳ」がキュートな「グラフアート」シリーズに仲間入り！

A3MARKETにてオリジナルグッズ発売中！

株式会社A3より「英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ -THE END OF SAGA-」オリジナルグッズが、全国15店舗のA3MARKETにて絶賛発売中！ゲームイラストグッズに加え、可愛くデフォルメされた「グラフアート」グッズ、ミニキャラグッズなど豊富なラインナップが勢ぞろい！

[GraffArtシリーズ]



[A3オリジナルミニキャラ]



■取り扱い店舗
【GraffArt Shop with A3MARKET】 http://graffartshop.athree3.com/
E BeanS 仙台／千葉／柏マルイ／池袋P'PARCO／池袋本店／町田／横浜／名古屋／なんば／天王寺／神戸三宮／広島／岡山／福岡天神
※名古屋／横浜は２月３日(日)からの販売となります。
【A3MARKET in 秋葉原店】 http://a3market-akiba.athree3.com/

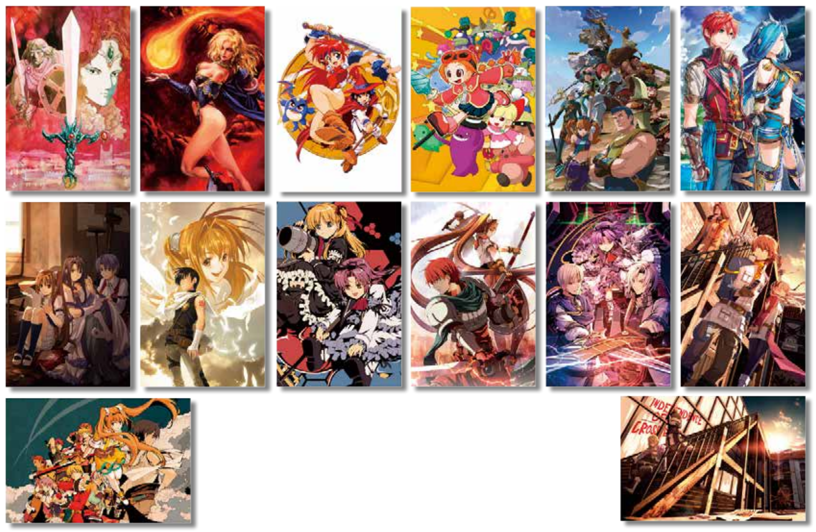
名作タイトルのビジュアルがズラリ！

「ファルコム絵はがきコレクション」ファルコムショップにて販売中！

「イース」「軌跡」シリーズをはじめ、「ガガーブトリロジー」「ぐるみん」「ソーサリアン」などファルコム歴代タイトルのイラストを使用した絵はがきコレクションが登場！



No.01 ～ 40
からお好きな絵柄を選択してご購入いただけます。





■商品名
ファルコム絵はがきコレクション No.1 ～ 40
■サイズ
100 × 148mm
■価格
［単品］200円（税抜）
［セット］8,000円（税抜）
■商品ページURL
https://falcom.shop/products/detail/265

2019年は『軌跡』シリーズ15周年！

英雄伝説 閃の軌跡 ～メンタルクロスリンク～

歴代『軌跡』原作ファルコムBOOKS試し読み！



『軌跡』シリーズが2019年6月に15周年を迎えることを祝して、今号から『軌跡』シリーズを原作としたファルコムBOOKSのお試し読みができる企画がスタート！　第1回となる今回は、昨年完結した『閃の軌跡』シリーズより、草薙アキ先生が手がける特科クラスⅦ組のドタバタ劇『英雄伝説 閃の軌跡 ～メンタルクロスリンク～』をお届け！

製品情報
好評発売中
著　　　：草薙アキ
イラスト：YahaKo
定　　価：1,200円（税別）

プロローグ

「いくぞ、皆！」
叱咤するように声を張り上げたのは、東方由来の刀を握った、精悍な顔立ちの少年だった。
リィン・シュバルツァー。
ゼムリア大陸西部の軍事国家――エレボニア帝国。
その北部にあるユミルの貴族――シュバルツァー男爵家の養子で、ここトールズ士官学院特科クラス《Ⅶ組》のリーダー格でもある少年だ。
幼い頃に東方剣術の集大成と言われる、《八葉一刀流》の開祖――《剣仙》ユン・カーファイに師事し、今では〝初伝〟を受けるまでの腕になっている。
「ええ！」「承知！」「Ja（ヤー）！」
彼の声に頷いたのは、見目麗しい三人の少女たち。
だがそれぞれの手には、その可憐な見てくれとは似つかわしくない〝獲物〟が握られていた。
金髪の少女は導力式の弓を、青髪の少女は身の丈ほどもある大剣を、銀髪の少女は二丁の銃剣を握り、リィンと同じく目の前の敵――〝首のない鎧姿の魔獣〟と対峙していたのだ。
帝国領トリスタにあるトールズ士官学院には、〝旧校舎〟と呼ばれる無人の建物がある。
これは古代ゼムリア文明が滅びた謎の現象――通称《大崩壊》の後、五〇〇年間続いた戦乱

の時代に建てられた代物だと言われており、内部は遺跡構造になっている。
建造にどのような技術が用いられているのかも定かではない上、ここ最近は毎月の如く内部の構造が変化することから、リィンたちは学院長のヴァンダイクより、ここの調査を任されていたのだ。

そして今——地下五層で彼らは戦っていた。

敵は一体だが、通常の魔獣ではない。

地下四層の時に現れた相手と同じく、〝扉〟の向こうから現れた謎の敵。

だからこそ油断は出来ない。

一瞬の隙が命取りに繋がる。

ならば全力で——一気に叩くしかない！

「——我が剣に集え……っ」

リィンたちはそう覚悟を決め、各々が持つ最大最強の奥義——〝Sクラフト〟を発動させたのだった。

一章——□ イリーナ・ラインフォルトからの新たな依頼



話は少し前に遡る。
うだるような暑さも終わりを告げた、九月上旬のある自由行動日のこと。
第三学生寮の自室で勉強をしていた、アリサ・ラインフォルトの元に、実家のメイドにして、この第三学生寮の管理人でもある、シャロン・クルーガーが訪ねてきたのが始まりだった。
「――お嬢さま、少しよろしいでしょうか？」
二回ほどノックした後、涼しそうな声でシャロンは尋ねる。
紫を基調としたメイド服に身を包んだ、柔和な面持ちの美女である。
アリサにとっては頼れるお姉さん的な存在であり、彼女の得意とする弓術もシャロンから教わったものだ。
「シャロン？　どうしたの？　入っていいわよ」
「失礼いたします」
ドアを開け、一礼した後、歩を進めるシャロン。
ただ普段通りにしているだけなのだが、所作の一つ一つには、なんとも言えぬ気品が感じられた。
そんなシャロンを迎えたのは、煌々と輝く金の髪を、ツーサイドアップ状に結っている美少女だった。
アリサ・ラインフォルト。

　エレボニア帝国最大の重工業メーカー――ラインフォルト社の令嬢にして、特科《Ⅶ組》の一員でもある少女だ。
　《Ⅶ組》の象徴とも言うべき〝深紅の制服〟を見事に着こなし、シャロンのことをその宝石のような緋色の瞳でじっと見据えていた。
　アリサの前に辿り着いたシャロンは、再び一礼する。
「お勉強中に失礼いたします」
「別に構わないわ。そろそろ終わろうと思っていたし」
　ノートをぱたりと閉じ、アリサは椅子から腰を上げ、腕を組む。
「それでどうしたの？」
「はい。実はイリーナ会長より、新型ＡＲＣＵＳ（アークス）の試験をして欲しいというご依頼がございまして」
「母さまから？」
「はい。ラインフォルト社からの正式なご依頼ですので、すでに各理事の方々を始めとし、学院長のヴァンダイクさまや、生徒会長のトワさまからもご了承をいただいております」
「……つまり否が応でも受けろってことじゃない」
　相変わらずの手回しの速さに、アリサは小さく息を吐いた。
　シャロンほど有能なメイドは、世界中のどこを探しても、数人存在するかどうかというレベ

ルだろう。
　常に微笑みを絶やさず、炊事などの家事はおろか、イリーナからの仕事も完璧にこなす。
　あまりの有能ぶりから、〝スーパーメイド〟などと呼ばれていたりもするが、事実シャロンは有能――いや、メイドとしては〝完璧〟と言っても過言ではない。
　癪だが、それはアリサとしても認めざるを得ないことであった。
「まあいいわ。シャロンに敵わないのはいつものことだし」
「恐れ入ります」
　にこりと微笑むシャロンに、アリサはジト目混じりの眼光を向ける。
「で、私はどうすればいいの？」
「はい。まずはリィンさまのお部屋に向かいましょう」
「リィンの？」
「はい。あ、それよりお越しいただいた方がよろしいですか？　それでしたら、私は席を外させていただきますが」
「あ、あなたがいなくなってどうするのよ!?」
　慌てて突っ込むアリサに、シャロンはふふっといたずらな笑みを浮かべる。
「……まったく」
「ふふ、申しわけございません」



「別にいいわ。それよりリィンのところに行くのでしょう？」

「はい。今回のご依頼は、主に《Ⅶ組》の皆さまのお力をお借りすることになりますので、リーダー格であるリィンさまにお話しするのがよろしいかと」

「分かったわ。じゃあ行きましょう」

「――なるほど。新型ＡＲＣＵＳの試験ですか」

アリサ同様、シャロンから一通りの説明を受けたリィンは、頷き、「分かりました」と協力する旨を伝えた。

「俺でよければ協力させてください」

「ありがとうございます。それではこちらが今回使用していただく、新型のＡＲＣＵＳになります。現在使用されているＡＲＣＵＳに関しましては、一度私の方で預からせていただきますので」

シャロンから新型のＡＲＣＵＳを二機ずつ受け取ったリィンとアリサは、それをお互いまじまじと見つめる。

現在使用しているＡＲＣＵＳとは、少々デザインが異なるようだ。

ＡＲＣＵＳは、ラインフォルト社とエプスタイン財団が共同開発した、次世代型戦術オーブメントで、端的に言えば〝持ち主の戦闘力を強化する携帯端末〟である。

戦闘中に高度な連携を可能とする、〝戦術リンク〟機能を最大の特徴とし、便利な通信機能も搭載されている。

「会長からお預かりしている新型ＡＲＣＵＳは、全部で四機ですので、後二名ほど《Ⅶ組》の方々からご協力いただければと思います」

「分かりました。戦術リンクを駆使して、普段通りの戦い方をすればいいんですね？」

「ええ、そういうことになります。皆さまの準備が整いましたら、一言お声をかけてくださいませ。試験には私も立ち会わねばなりませんので」

「はい。その時はよろしくお願いします」

「いえいえ、こちらこそですわ」

良い雰囲気で談笑する両者（主にリィン）に、アリサはじろっと半眼をぶつける。

当然、そういう行動に出るだろうと見越していたシャロンは、メイドの嗜みとして気を使う。

「では私はこれで。人払いをしておきますので、後はお二人でごゆっくり」

「そ、そういうのはいいから！」

「？」

何故アリサが慌てているのか、リィンだけはよく分かっていなかったようだ。

行動は早い方がいいだろうと考えたリィンは、アリサとともに協力してくれるメンバーを探すことにした。

手っ取り早くＡＲＣＵＳの通信機能を使おうとしたのだが、連絡先がインプットされている自身のＡＲＣＵＳは、先ほど二人ともシャロンに渡してしまったことを思い出す。

「しまった。ＡＲＣＵＳはシャロンさんに渡したんだった」

「まだ一階にいるかもしれないわ。一度シャロンのところに行きましょう」

「ああ、分かった」

と、勢い込んだものの、シャロンの姿は寮内のどこにも見つけることは出来なかった。

恐らく外出してしまったのだろう。

ならば仕方がない、とリィンたちは直接《Ⅶ組》のメンバーに声をかけることにした。

寮内には誰もいなかったので、トリスタの町か、学院の方に出向いているはずだ。

そう考えたリィンたちは、喫茶店であり、宿泊も扱っている《キルシェ》や、食品や雑貨などを扱っている《ブランドン商店》、ブティックの《ル・サージュ》、ブックストアの《ケインズ書房》と回り、最後に質屋の《ミヒュト》にも寄ってみたが、《Ⅶ組》のメンバーを発見することは出来なかった。

「うーん、どうやらこっちの方にはいないみたいだな」

「そうね。やっぱり学院の方かしら？」

「ああ、たぶんそうだろう。クロウ以外は皆部活に入ってるし、もしかしたら部室の方にいる

かもしれないな」

「その可能性はあるわね。じゃあ行ってみましょうか」

「そうだな」

　再び歩き始めたリィンたちは、途中、橋の近くで釣りをしている、釣皇倶楽部のケネスを見かけたので、軽めの会釈をしておいた。

　というのも、リィンはケネスから釣りを勧められ、今では〝黒竿釣師〟の称号を得るまでになっていたからだ。

　釣果に応じてポイントが貯まり、それをケネスが様々なアイテムと交換してくれるため、割とお世話にもなっている。

　中にはソーディやカルブ、サモーナといった魚たちのバッジもあり、これは女子にも人気があるらしい。

　七耀教会の礼拝堂も覗いてみたが、同じ学年でシスター見習いのロジーヌが子どもたちの相手をしているだけで、《Ⅶ組》のメンバーはいないみたいだった。

「やっぱり学院の方にいるみたいね」

「ああ、そうらしい。とりあえず学生会館に行ってみよう」

「ええ、分かったわ」

　学生会館に到着したリィンたちは、二階へと上り、〝読書部〟の札がある扉の前へと立った。学生会館は、その名の通り生徒たちの生活をサポートするための施設であり、食堂や購買部、文化系部活の部室に生徒会室、最上階には貴族専用のサロンも存在する。

「えっと、さすがにそういうのは……」

　部室の中からは、見知った女性の声が聞こえており、リィンたちは《Ⅶ組》メンバーの一人がここにいることを確信した。

「すみません」

　言いながらリィンがノックをすると、

「はい、どちらさまでしょうか?」

《Ⅶ組》メンバーの一人である、エマ・ミルスティンが扉を開けた。

「あら、リィンさん?　それにアリサさんも」

　少々驚いたような顔をする、三つ編みと眼鏡が特徴的な美少女。

　エマ・ミルスティン。

《Ⅶ組》のクラス委員長を務めている少女で、学年トップの成績を誇るほど優秀だが、それを傲ることのない、柔和で優しい性格の持ち主であり、〝委員長〟の愛称で親しまれている。

　一見すると、地味な印象を受けるが、《Ⅶ組》の女子の中では、最もスタイルがよく、とくに胸元の成長が著しい。

「やあ、委員長。少し話せるか？」
「あ、はい。ちょっと待ってくださいね」
そう言って、エマは部屋の奥に腰かけていた少女――読書部の部長であるドロテに一言二言話しかけた後、一礼して戻ってきた。
余談だが、この読書部は通常のそれとは異なり、なんでも〝乙女の嗜み〟なるものを学ぶための部らしい。
一体〝乙女の嗜み〟というのは、どういう類のものなのだろうか。
リィンがそんなことを考えていると、「お待たせしました」とエマが再度声をかけてきた。
「それで、私に何かご用でしょうか？」
「ああ、それなんだが……」
ちらっとアリサの方に視線を向けてみれば、彼女は静かに頷いた。
つまりリィンから伝えてもらって構わないということだ。
アリサの意を汲み取ったリィンは、先ほどシャロンから伝えられたことを、そのままエマに話した。
「なるほど。それで試験に参加出来る方を探しているのですね？」
「ああ、そういうことになる。もし時間があれば、委員長に頼みたいんだが……」
そう告げると、エマは少々申し訳なさそうに顔を曇らせた。

「……ごめんなさい。これから部長の作業をお手伝いする約束をしていまして……」
「そうだったのか……。いや、気にしないでくれ。そういうことなら、無理強いは出来ないしな」
「そうね。他を当たってみましょう。邪魔してごめんなさい、エマ」
「いえ、こちらこそお力になれなくて申しわけありません」
「ううん、気にしないで」
手を小さく振るアリサの言葉に、エマも少し気が楽になったのか、「それでは」と頭を下げ、部室に戻っていった。
「委員長は忙しいみたいだな」
「まあ仕方ないわ。他の人を当たりましょう。確かここにはマキアスの部室もあったわよね？」
「ああ、その部屋だな」
次にリィンたちが向かったのは、《Ⅶ組》メンバーの一人――マキアス・レーグニッツが籍を置く、第二チェス部の部室だった。
〝第二〟と付くところからも分かるように、この学院には〝第一チェス部〟というものが存在する。
〝第一〟と〝第二〟の違い――それは〝身分〟だ。
前者は貴族の生徒たちで構成されており、後者は平民の生徒たちが主となっている。
これはチェス部に限ったことではないが、両身分の軋轢は決して浅いものではなく、大きく

分ければ、《貴族派》と《革新派》という両派閥が、水面下で常に火花を散らしている。
身分に囚われない人材育成を謳っているこのトールズ士官学院でさえ、貴族は白い制服を、平民は緑の制服を着用するなど、色々と区別されており、待遇も違う。
とはいえ、皆が皆反発し合っているわけではなく、リィンたち《Ⅶ組》のように、身分に関係なく集められたクラスも存在している。
先ほどと同様に扉をノックすると、中から『どうぞ』というマキアスの声が返ってきた。
どうやら彼もここにいるようだ。
「失礼します」
リィンが扉を開けると、マキアスと部長のステファンが、チェス盤を挟んで睨み合っていた。
「リィンと……アリサか？　少し待ってくれ。今大事な局面なんだ」
「あ、ああ……」
マキアス・レーグニッツ。
エマに次ぐ秀才で、彼女をライバル視している、短髪と眼鏡が特徴的な少年だ。
努力家の上、負けず嫌いで、入学当初は《Ⅶ組》の中でもとくに〝貴族〟というものに嫌悪感を抱いていた。
平民初の帝都知事である、カール・レーグニッツの息子でもあり、そのことが原因で、特別実習の際、〝翡翠の公都〟と呼ばれる貴族の都――バリアハートで拘束されるという事件もあった。
もっとも、その時は同じ《Ⅶ組》のメンバーである、貴族のユーシス・アルバレアの協力もあり、なんとか事なきを得たのだが。
張り詰めた空気の二人を遠巻きに見ていたリィンたちは、あまりの緊張感に息をすることすら忘れてしまっていた。
「――チェックメイトです、部長」
「うぐっ……。さすがだ、マキアス君。僕の完敗だ……」
「いえ、僕もかなり追い詰められていました。第一チェス部との試合も近いですし、まだまだ煮詰める必要がありそうです」
「そうか……。いや、うん。その通りだ。もう一戦お願い出来るかい？」
「もちろんです、部長。と、その前に……」
顔を上げたマキアスに、リィンたちもはっと意識を取り戻す。
「凄い対局だったな、マキアス」
「いや、このくらいは当然さ。何せ、第一チェス部との――〝部の存亡をかけた試合〟が控えているからな」
「えっ……」
どういうことかと聞く前に、マキアスの方から「ところで僕に何か用か？」と尋ねられた。

（ね、ねえ、リィン？　なんだかかなり切迫した状況みたいなのだけれど……）
（みたいだな……。〝部の存亡をかけた〟と言うくらいだ。恐らく俺たちが考えている以上に重みのある試合なんだろう）
（そう……。ならマキアスに頼むのは止めておきましょう。彼には彼にしか出来ないことがあるみたいだし）
（そうだな。俺もアリサと同意見だ）
リィンたちが小声で相談していると、マキアスが小首を傾げながら問うてきた。
「なんだ、二人でこそこそと。僕に用があったんじゃないのか？」
「いや、大した用じゃないし、マキアスの方も忙しそうだからな。今回は止めておくよ」
「そうか。いや、正直助かる。力になれなくてすまないな」
「いや、気にしないでくれ。じゃあ俺たちはこれで」
「ああ」
退室した後、アリサは小さく一息吐いた。
「……ふう。見ているこっちが緊張しちゃったわ」
「そうだな。二人とも凄い気迫だった。しかし参ったな……。委員長に続いてマキアスも駄目か……」
「まあ仕方ないわよ。無理を言っているのはこちらだもの。あまり気にせず次を当たってみましょう」
「分かった。ギムナジウムにはラウラがいるはずだ。行ってみよう」
「ええ」

ギムナジウムは、主に生徒の鍛錬を目的とした施設だ。
修練場やプール、運動系部活の部室のみならず、地下には射撃などの訓練が行える戦術訓練場も備わっており、生徒たちが日々汗を流し続けている。
プールで《Ⅶ組》メンバーの一人にして、水泳部に所属するラウラの姿を見つけたリィンたちは、丁度プールサイドに上がった彼女の元へと駆け寄った。
水泳帽を脱いだラウラは、その流れるような青い髪をポニーテール状に結い、プールサイドに置かれたベンチで休息していた。
ラウラ・Ｓ・アルゼイド。
凛然とした面持ちと、日々の鍛錬によって培われた抜群のスタイルを持つ美少女で、騎士道を重んじている。
こんなにも清艶な容姿の持ち主である彼女だが、その実〝新入生最強〟と呼ばれるほどの実力者でもあり、《光の剣匠》と呼ばれる、帝国最強の剣士――ヴィクター・Ｓ・アルゼイドを父に持つ。

名からも分かるように、彼女の修得した剣術は、帝国内でも誉れ高い《アルゼイド流》だ。
周知の事実だが、アルゼイドの家は、同じく武の名家として知られる、ヴァンダール家と双璧を成す存在でもある。
リィンたちの存在に気づいたラウラは、「おや？」と不思議そうな顔をしていた。
「どうしたのだ？　水練の稽古にでも来たのか？」
「いや、今日はラウラに用があってな」
「私に？　そうか。では着替えるので、少し待っていてもらえるだろうか？」
「それは構わないが、水泳部の練習はもういいのか？」
「ああ。今日は軽く流していただけだからな。問題ない」
そう言って、ラウラはベンチから腰を上げた。
残った水滴が、彼女の身体のラインを伝って床に落ちる。
たったそれだけのことであるが、リィンの目にはそれがなんとも美しい――高名な芸術品のように思えてしまった。
「――」
が――じろりっ。
「リ、ィ、ン？」
それに気づいたアリサの目は、あきらかに笑っていなかった。

「い、いや、違うんだ。俺は決していやらしい気持ちで見ていたわけじゃ……」
「さあ、どうだか？　あなたには〝前科〟があるし。この前の水練の授業も、同じことを言ってたけれど、やったことと言えば――」
「……分かった。俺が悪かった……」
どれも不可抗力に違いはないが、がっくりと肩を落としたリィンを放置し、アリサはラウラに告げる。
「じゃあ私たちは更衣室の前で待ってるから。きちんとリィンのことは見張っておくから、あなたは安心して着替えてちょうだい」
「ふふ、承知した。では後ほど」
更衣室に向かうラウラを見送った後、失意のリィンは「ほら、行くわよ」とアリサに引っ張られていった。

「――承知した。私でよければ協力しよう」
着替え終わったラウラに事情を説明すると、彼女はすんなりとそれを承諾してくれた。
三人目にして得たようやくの成果に、リィンたちは揃って安堵の表情を浮かべた。
「ありがとう、ラウラ」
「ふふ、構わぬ。困った時はお互いさまだ。それにこれは私にとってもいい鍛錬になりそうだ

からな」

「いや、それでも本当に助かったよ。俺からも礼を言わせてくれ」

「分かった。ならば素直に受け取っておこう」

微笑み合い、三人は最後の協力者を捜すため、ギムナジウムを後にしてグラウンドに向かった。

グラウンドでは、アリサの所属するラクロス部の他、先の話題でも出たユーシス・アルバレアの所属する、馬術部などが精力的に活動している。

厩舎の前で馬の世話をしていたユーシスの姿を発見したリィンたちは、「お疲れ、ユーシス」と労いの声をかけた。

「なんだ、誰かと思えばお前たちか」

やや尊大な口調で振り向いたのは、どこか高貴な雰囲気漂う、金髪に碧眼の少年だった。

ユーシス・アルバレア。

貴族の中でも〝四大名門〟と呼ばれる名家の一つ――アルバレア公爵家の次男で、言動は尊大だが、心根は仲間思いの優しい少年である。

貴族を毛嫌いしていたマキアスとは、一時期険悪な関係であったが、特別実習などの経験を経て、口ではあれこれ言い合いつつも、今では良きライバル的な間柄となっている。

ユーシスは馬の世話をする手を止め、リィンたちに向き直った。

「揃って現れたところを見ると、何か俺に用があるらしいな?」

「ああ。実は少し協力してもらいたいことがあるんだ。もちろんユーシスの手が空いていればの話なんだが……」

「ほう。手が空いているかどうかは見ての通りだが、一応言うだけ言ってみろ。聞く耳くらいは持ち合わせているつもりだ」

「分かった」

頷き、リィンは何度目かの同じ説明をユーシスにする。

リィンの話を黙って聞いていたユーシスは、聞き終えた直後に「そういうことか」と納得した様子を見せたのだが、

「悪いが他を当たってくれ。新型のＡＲＣＵＳというものには、俺も興味があるが、今はこいつらの世話で少々手が離せんのでな」

白馬の首元を優しく撫でながら言うユーシスに、リィンは口元をふっと和らげた。

「いや、気にしないでくれ。ユーシスならそう言うと思っていたからな」

「そうか。また用があれば声をかけるがいい。手を貸せる時もあるだろう」

「ああ、その時はよろしく頼む」

ユーシスの元を後にしながら、リィンたちは次にどこに向かうかを話し合う。

「そういえば、クロウ先輩とかはどうなの?　いつも暇そうにしているけれど?」

「ああ、クロウか……」
問われたリィンの顔に曇り色が宿る。
アリサの言ったクロウ・アームブラストは、リィンたちの一年上の先輩にあたるのだが、授業をサボり過ぎたおかげで単位が不足し、現在はそれを埋めるため、期間限定で《Ⅶ組》に編入している。
面倒見の良い性格だが、色々とおちゃらけており、子ども相手に《ブレード》というカードゲームで賭け事（飴などだが）をするなど、いわゆるガキ大将みたいな少年である。
困ったように頭を掻くリィンに、アリサとラウラはこぞって顔を見合わせた。
「実は夕べ話した時に、今日は帝都で〝絶対に外せないレース〟があるとかで、今は多分ヘイムダルにいるはずだ」
「ふむ、以前実習で訪れた際も、何やら賭け事に興じていた気がするが……」
「ああ。もっとも、未成年だから実際にレースに参加するわけじゃなく、雑誌か何かの企画でハガキを送って応募するような形だったはずだ」
「なるほど。それで今回もその結果を直で見るために、わざわざ帝都まで行ったわけね？」
「ああ、そういうことになるな」
揃って嘆息し、それならば仕方がないということで、意見を一致させる三人だった。

本校舎に移動しようとしたリィンたちは、途中、写生用具を片手に歩く、褐色肌に長身の少年と、偶然にも出会うことが出来た。
ガイウス・ウォーゼル。
エレボニア帝国の国境に位置する、ノルド高原で生活する遊牧民の生まれで、自然を愛する真面目な少年だ。
《隻眼のゼクス》と呼ばれる、帝国軍のゼクス中将を魔獣の群れから救ったことで、士官学院への推薦を得、今に至っている。
絵を描くことが趣味であり、以前はノルドの風景をよく描いていたらしく、技術を学ぶため、今は美術部に所属している。
「……む？」
リィンたちの存在に気づいたガイウスは、しっかりとした足取りでこちらに近づいてきた。
「やあ、ガイウス」
「ああ。アリサとラウラも元気そうで何よりだ」
「うむ、そなたもな」
「まあ昨日の今日だしね。それは絵の道具？」
アリサに問われたガイウスは、「そうだ」と大きく首肯した。
「部長に言われてな。たまには普段行かない場所で刺激を受けてこいとのことだ」

「なるほどね。確かにいつも部屋の中じゃ、いいアイディアも浮かばないでしょうし」
「ふむ、一理あるな。私も故郷にいた頃は、様々な場所で鍛錬を行ったものだ」
「えっと……それはまた別の問題だと思うのだけれど……」
「ふむ？」
　小首を傾げるラウラに、「まあいいわ」とアリサは話を切り替える。
（リィン、どうするの？）
（そうだな、個人的には頼みたいが、せっかく今日は天気もいいし、絵を描くにはもってこいの日だと思う。何より美術部としての活動中だからな。残念だが他を当たろう）
（そうね。私もそれがいいと思うわ）
（うむ、異存はない）
　密談し、結論の出た三人は、それをガイウスに伝えることにした。
「大丈夫か？　オレに用があったように見えるのだが……」
「ああ。実は頼みたいことがあったんだけど、そこまで重要なことじゃないから気にしないでくれ。それよりいい絵が描けるといいな」
「ありがとう。そう言ってくれると、いい風に恵まれそうな気がしてくる」
「じゃあ頑張ってね」
「また会おう」

「ああ。リィンたちの方も頑張ってくれ」
　ガイウスを見送り、リィンたちは再び本校舎を目指す。
《Ⅶ組》のメンバーで残っているのは、あと三人。
　そのうちの一人でも協力してくれればよいのだが……。
　そう思いながら、リィンたちは吹奏楽部に所属する、エリオット・クレイグがいるであろう音楽室の前にやって来た。
　中からは多種多様な楽器の音色が聞こえてきており、リィンたちは演奏が止んだのを確認してから扉をノックし、エリオットを呼び出した。
　運よくエリオットは音楽室内で活動しており、呼び出しに応じて廊下の方に来てくれた。
「やあ、リィン。それにアリサにラウラも。三人揃ってどうしたの？」
　どこか母性本能をくすぐる微笑みでリィンたちを迎えた、鮮やかな紅髪が特徴の少年。
　エリオット・クレイグ。
〝帝国軍最強〟と謳われる、第四機甲師団の団長――《紅毛のクレイグ》ことオーラフ・クレイグを父に持つが、ピアノ教師であった母と姉の影響を強く受けており、彼自身は軍人ではなく、音楽家を目指している。
　年上受けする可愛らしい容姿のため、故郷にいた頃は、ご近所のお姉さん方から莫大な支持を得ていたらしい。

「お疲れ、エリオット。相変わらず楽しそうだな」
「うん！　音楽は楽しいよ！」
　満面の笑みでそう言うエリオットの様子に、リィンたちは本当に音楽が好きなんだなと温かい気持ちになった。
「あ、ごめんごめん。それでどうしたの？　僕に何か用？」
「ああ。実はエリオットに頼みたいことがあったんだが……今は何かの練習中だったのか？」
「あ、うん。リィンたちも来てくれた、この前の演奏会なんだけど、嬉しいことに凄く評判が良くてね。それでまた是非演奏会を開いて欲しいって言ってくれる人たちがいたんだ」
「なるほど。それでそなたらはその演奏会に向けて、皆で練習をしていたのだな？」
　ラウラがそう問えば、エリオットは清々しいくらいの笑顔でこくりと頷いた。
「うん、そうなんだ。もう少ししたらまた実習とか始まっちゃうでしょ？　だから今しか時間がなくてね」
「そうか。それは邪魔してすまなかった」
「ううん、気にしないでよ。休憩だって大事だしね。それで頼みたいことって何かな？　僕に出来ることならいいんだけど」
「「「……」」」
　エリオット以外の三人が、無言で顔を見合わせて頷く。

　この状況で頼むことなど出来はしない――三人が三人ともそう考えていたのだ。
「いや、大したことじゃないし、もし手が空いていればの話だから気にしないでくれ」
「えっ？　でもわざわざ三人で来るぐらいだし、大切なことだったんじゃないの？」
　申し訳なさそうな顔をするエリオットに、アリサは苦笑しながら小さく両手を振る。
「いいのいいの！　シャロンにちょっと頼まれたことだから、私たちだけでもなんとかなるし。それより次の演奏会、とても楽しみにしているから頑張ってね」
「うん、ありがとう。でも本当に大丈夫？」
「案ずるな。私もついている」
「そっか。じゃあ悪いけど、そっちは皆に任せるよ」
「ああ、頑張ってくれ」
「うん！　じゃあまたね！」
　最後にもう一度微笑み、エリオットは室内へと戻っていった。
　再び演奏が聞こえ始めてから、リィンたちも次の場所へと向かい始めるのだが、
「……ああは言ったけれど、さすがにちょっと心配になってきたわ」
「あ、ああ……。そうだな」
「うむ……」
　三人の足取りは少々重いものになっていた。

残る《Ⅶ組》メンバーは二人。
もしこの二人が駄目ならば、最悪《Ⅶ組》の担任である、サラ・バレスタインに頼むか、それとも《Ⅶ組》ではない他のARCUS所持者に頼むか……。
どちらにせよ、今回の依頼はARCUSの試験配備がされている、《Ⅶ組》へのものだ。可能な限り《Ⅶ組》のメンバーで試験に臨みたい。
リィンにしろアリサにしろ、その気持ちは同じだった。
「──よし、気を取り直して、次は調理室へ行こう。ミリアムがいるかもしれないからな」
そう勢い込み、調理室に向けて歩き始めたリィンだったが、
「……あのね、リィン。非常に言いにくいのだけれど……」
と、アリサが視線を外しながら彼の足を止めた。
「どうしたんだ？」
「とりあえずあれを見よ」
窓の外を指差すラウラの視線の先を追ってみると、
「ミ、ミリアム⁉」
そこにはゆらゆらとどこかへ飛び立っていく、ミリアム・オライオンの姿があった。
ミリアム・オライオン。
一見すると、無邪気で人懐こい性格の少女だが、その正体は《白兎》のコードネームを持つ、帝国軍情報局に所属するエージェントである上、《鉄血宰相》の異名を持つ、エレボニア帝国の宰相──ギリアス・オズボーン配下《鉄血の子供たち》の一人でもある。
《Ⅶ組》に編入したのも、《鉄血宰相》の指示によるものであり、彼女にはなんらかの任務が課せられているらしい。
これだけの経歴を持つ彼女だが、実年齢は未だに〝13歳〟というから驚きである。
そんなミリアムが、今リィンたちの目の前で、自身の持つ謎の傀儡──アガートラムの腕に乗り、何処かへと飛び立っていく。
リィンは慌てて窓を開け、小さくなっていくミリアムの背に向けて叫んだ。
「ミリアムー！」
「あ、リィンだ！　ヤッホー！」
ミリアムは無邪気に笑いながら、大きく手を振っていた。
「いや、ヤッホーじゃなくって……。どこへ行くんだー？」
「部活でクッキー作ったから、レクターたちに分けてくるねー！」
ちなみにミリアムの言うレクター・アランドールも、彼女と同じ《鉄血の子供たち》の一人である。
つまり帝都へイムダルに向かおうとしているわけだ。
「じゃあねー！」



　ふりふりと再度大きく手を振り、ミリアムは飛んで行ってしまった。
　残り二人のうち、早速一人の可能性が消えた瞬間であった。
　残されたリィンたちは、ただ呆然と彼女を見送ることしか出来なかった。
「「「……」」」
　なんだか無駄に気疲れしたリィンたちだったが、旧校舎のベンチで昼寝をしていた《Ⅶ組》メンバー最後の一人――フィー・クラウゼルと出会ったことで、その気持ちは一気に吹き飛んだ。
「……ん。いいよ」
　詳細を聞いたフィーが、二つ返事で了承してくれたからだ。
　フィー・クラウゼル。
　面倒臭がりの性格で、いつも眠そうな顔をしている小柄な美少女だが、驚異的な身体能力を持ち、二階くらいの高さなら、普通に飛び降りたり、壁伝いに駆け上がったりする。
　というのも、フィーは元々《西風の妖精》と呼ばれるほどの猟兵――つまりは〝傭兵〟であり、ゼムリア大陸でも屈指の猟兵団である、《西風の旅団》の一員だったのだ。
　そのことで、〝猟兵〟というものにあまり良い印象を抱いていなかったラウラと、一時期不穏な間柄になったこともあったが、今ではお互いに認め合い、《Ⅶ組》の中でも最強のコンビ

となっている。

　フィーの参加で、なんとか試験に必要な人数を集めることが出来たリィンたちは、ほっと胸を撫で下ろしていた。

「助かったよ、フィー。これで無事に依頼を遂行することが出来そうだ」

「そうね。まさかラウラ以外、皆忙しいとは思わなかったわ……」

「……そうなの？」

　未だに眠いのか、目元を擦りながらフィーが尋ねる。

「うむ。だからこそそなたに感謝を。助かったのは事実だ」

「……そう。ならよかった」

　ぐいっと背筋を伸ばし、フィーがベンチから立ち上がる。

　それを確認したアリサは、皆に向けて告げた。

「じゃあ一度シャロンのところへ行きましょう。たぶんそろそろ寮に戻って来ていると思うし」

「ああ」「承知した」「……ん。了解」

　三者三様に返事をし、リィンたちは第三学生寮へと歩を進めた。

　学生寮でシャロンに試験メンバーが集まったことを報告したリィンたちは、その足でギムナジウムにある修練場へと向かった。

　いつもはフェンシング部などが活動をしているのだが、お昼前ということもあってか、今は丁度空いているようだった。

　ラウラとフィーが自身のＡＲＣＵＳをシャロンに渡し、リィンたちからそれぞれ新型のＡＲＣＵＳを受け取る。

　少しの間、物珍しそうにそれを観察していた二人だったが、早速装備し、準備が万全であることを態度で表していた。

「皆さま、本日はラインフォルトからのご依頼にお集まりいただいたことを、会長に代わり、私の方からお礼を申させていただきます」

　恭しく頭を下げるシャロンに、リィンたちは少々こそばゆい思いだった。

「いえ、気にしないでください。理事であるイリーナ会長には、俺たちもお世話になっていますし、協力出来ることがあるなら、いつでも言ってくれて構いません」

　リィンの言葉に、ラウラとフィーも頷く。

　アリサは腕を組みながらも、少々赤みを帯びた顔で、「まあ無下には出来ないし……」と言っていた。

　そんな彼女の様子にふふっと嬉しそうな微笑みを浮かべたシャロンは、改めて今回の趣旨を説明し始めた。

「ありがとうございます、皆さま。それでは私の方から、此度のご依頼を改めてご確認させて

いただきます。今回、皆さまに試験していただくのは、新たに開発されたＡＲＣＵＳです。改良点といたしましては、より戦術リンクの精度を向上させ、戦闘での連携を一ランク上のものへと昇華させることを目的としております」

「つまり今まで以上に強力な連携技が出来ると？」

ラウラがそう問えば、シャロンは笑顔を崩さずに首肯した。

「その通りです。現段階のＡＲＣＵＳでも、皆さまはかなり高いレベルで戦術リンクを使いこなしています。ですので、この試験が成功すれば、恐らくは〝二身一体〟という、高次元のシンクロが可能になることでしょう」

「二身一体……」

ごくりとリィンたちは固唾を飲む。

もし仮にそれが可能になったとして、《剣仙》ユン・カーファイと、《光の剣匠》ヴィクター・Ｓ・アルゼイドが戦術リンクを組んだとしたならば、恐らくはたった二人で帝国軍に壊滅的な打撃を与えることが出来ると言っても、過言ではないだろう。

もちろん未だ完成の域には達していないし、帝国軍には名うての武人たちもいる。

容易くはないだろうが、この試験には、それほどの可能性が秘められているということだ。

「とはいえ、まだまだ試験段階ですので、皆さまはどうぞお気を楽にして、試験に臨んでくださいませ」

リィンたちの緊張を見抜いたであろうシャロンが、場の空気をやんわりと和やかなものに変える。

おかげで大分気が楽になったリィンたちは、互いに頷き、早速試験を始めることにした。

リィンはアリサと、ラウラはフィーとそれぞれペアを組み、戦術リンクを結んで対峙する。

立会人をするのは、言わずもがなシャロンだ。

模擬戦とはいえ、気迫は真剣。

両陣営ともに鋭い睨みをぶつけ合う。

リィンは東方由来の剣――太刀を、アリサは導力式の弓をそれぞれ構え、対するラウラは身の丈ほどもある大剣を、フィーは双銃剣を両手に構え、シャロンの合図を今か今かと待ち侘びていた。

「それでは――始め！」

『――っ！』

瞬間、真っ先に駆け出したのは、リィンとフィーだった。

両者ともにスピードを重視するタイプの戦闘スタイルだからだ。

すかさずアリサは弓でリィンの援護をするが、

「甘い！」

「くっ⁉」

　ラウラの剛剣に阻まれ、そのまま肉薄される。
「燃え尽きなさい——ファイヤ！」
　が、アリサの炎の矢——《フランベルジュ》がラウラを襲う。
　しかしラウラも一歩も退かない。
　特攻の勢いを殺さず飛び上がり、アリサの技——つまりは〝クラフト〟を躱して自らのクラフト——《鉄砕刃》を仕掛ける。
「砕け散れ！」
「させるか！　——せいや！」
　そこに飛来するのは、リィンが放った三日月型の斬撃——《弧影斬》だ。
「なんの！」
　咄嗟に剣を翻し、ラウラはリィンの斬撃をガードする。
「余所見は感心しない。——行くよ」
　一瞬の隙を突き、リィンに向けてフィーの十字刃——《スカッドリッパー》が放たれる。
「そこだ！　——たあ！」
　リィンはそれを迎え撃つため、刀身を鞘へと収め、抜刀術——《紅葉切り》を放った。
「「……っ」」
　二人の剣戟が火花を散らし、両者はさらなる追撃を仕掛けようと、互いのペアの名を叫ぶ。

「行くぞ、アリサ！」「ラウラ、決めるよ！」
「分かった！」「任せるがよい！」

　その瞬間——戦術リンクが発動した。

『——なっ⁉』
　だがそれは彼らの想像していたものではなかった。
　凄まじい輝きがＡＲＣＵＳから放たれ、その場にいた全員が何かしらの方法で顔を覆った。
　一瞬にも永遠にも思えたその輝きは、いつの間にやら消失し、リィンたちは恐る恐る辺りを確認した。
　とくに何が起こったわけでもない。
　修練場の中に、別段変わった様子は見られなかった。
「シャロンさん、今のは……？」
「……お嬢さま？」
　アリサがそう問うと、シャロンは不思議そうに小首を傾げた。
「まったくなんなのよ……」
　リィンがうんざりしたようにそう言うと、シャロンはさらに首を傾げた。

「あら……？　リィンさま？」
「今のは一体なんだったのだ？　大丈夫か？　フィー」
さらには凛々しい口調で言うフィーと、
「……ん。大丈夫」
眠そうな顔で返答するラウラ。
「あら、これはもしかしますと……」
笑顔を保ちつつも、困惑したような声のシャロンに、一同は反応が遅れてしまったが、改めて周囲を見回したことで、何かがおかしいことに気がついた。
「あれ……？　どうして自分の姿が見えるんだ……？」リィンに向けて言うアリサ。
「えっ……？　なんで私が喋ってるの……？」アリサに向けて言うリィン。
「む？　フィーの姿がないぞ？」フィーを探すフィー。
「……ラウラ、わたしはここ」自分はフィーだと言うラウラ。
『……』
静寂——そして大絶叫。
「えええええええええええええっっ⁉　こ、これは一体どういうことよ⁉　って、なんで私がリィンの声で喋ってるのよ⁉」
「お、落ち着け、アリサ——いや、俺！　って、どうして俺が俺をなだめてるんだ⁉」

「もしかして……フィーか？」
「……ん。そう言うわたしはラウラ？」
「うむ。どうやらそのようだ」
「って、なんであなたたちはそんなに冷静なのよ⁉　私たち入れ替わっちゃったのよ⁉」
そう、違和感の正体。
それは戦術リンクを組んでいた互いの精神が、〝入れ替わってしまった〟ということだった。
リィンはアリサと、アリサはリィンと。
ラウラはフィーと、フィーはラウラと。
何故かそれぞれの精神が入れ替わり、鏡もないのに自分が自分の身体を見つめる事態となってしまっていたのだ。
「あらあら、これは困りましたわ」
「困りましたわじゃないわよ⁉　どうなってるのよ、これは⁉」
この状況でも優雅に構えるシャロンに、リィンが女性の言葉を使いながら猛抗議する。
いささか気味が悪いが、中身はアリサなのでそれも仕方のないことだった。
「恐らく戦術リンクの精度を向上させたＡＲＣＵＳの誤作動により、精神がシンクロを通り越して交換されてしまったのではないかと」
「みたいだね」



「うむ。珍しい経験だな」
「だからどうしてあなたたちはそんなに冷静なのよ⁉」
　とくに動じた様子を見せないラウラとフィーに、リィン（アリサ）は声を荒らげる。
「まあ相手がフィーだからな」
「……ん。わたしもラウラなら別に構わない」
「あ、あなたたちねえ……」
　互いに微笑み合う両者に、アリサは出る言葉もなかった。
「とにかく落ち着こう、アリサ。必ず解決策があるはずだ」
「……そうね」
　何故自分に諭されなければならないのか、言いしれぬ脱力感に苛まれながらも、アリサは幾許かの落ち着きを取り戻したようだった。
「――お嬢さま。いえ、今は〝お坊ちゃま〟とお呼びした方がよろしいでしょうか？」
「それが無駄な気遣いだと分かっていてやってるでしょ、あなた」
　ジト目のアリサを軽やかにやり過ごし、シャロンは続ける。
「実は私、一つ考えたことがございまして」
「もしかして何か解決策があるの⁉」
　シャロンの言葉に、アリサは期待に胸を膨らませた。

　この悪夢のような状況から脱せるのならば、たとえ多少強引な方法になったとしても構わない。
　リィンことアリサはそう覚悟を決め、シャロンの言葉を待った。
　が。

「――〝弟〟というのもよいものですね」

「……はっ？」
　シャロンの口にした言葉は、想像以上に傾（かぶ）いていた。
　呆然とするアリサに、シャロンは頬に手をあてながら言った。
「いえ、実は私、前々から〝弟が欲しい〟と思っておりまして」
「ごめんなさい。あなたが今何を言っているのか、全然まったくこれっぽっちも分からないし、分かりたくもないわ」
　叱責の念を込めてそう言うも、シャロンは揺るがなかった。
「願いが叶ってよかったですわ」
「全然よくないわよ⁉　どうしてくれるのよ⁉　私に一生リィンでいろって言うの⁉」
「いや、そんなに嫌がらなくても……。これでも毎日鍛錬を欠かしたことは」

「あなたは黙ってて！」
　くわっと自分でも見たことのないような形相で一喝され、「わ、分かった……」とリィンはラウラたちの元へと退避した。
「まあそう気に病むな。そのうちなんとかなるはずだ」
「ああ、そうだといいが……。とりあえずありがとう、フィー……じゃなく、ラウラか」
「……ん。わたしはこっち」
　言いながら、寝惚け眼のラウラが自分を指差す。
　ややこしいな……、と内心リィンは思いつつ、なるべく早めに状況の改善を願うのだが、
「さあ、どうぞ〝お姉ちゃん〟と呼んでくださいませ」
「呼ばないわよ⁉　というか、あなたこの状況を楽しんでるでしょ⁉」
「……はあ」
　それはあの二人が落ち着くまで、しばらく叶いそうにもなかった。
　ただ一つ言えるのは、自分が時折内股になり、女性の言葉を使って怒鳴り散らしている姿を見るのは、この上なく心にダメージを負うということだけだった。

☆『も!ファル学』全国書店及びネット書店にて第1巻発売中☆





☆来月は華麗に復活を遂げる予定のDすけ先生に励ましのお便りを!

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！

① 3名様 『も～っと集まれ！ ファルコム学園』缶バッジ

オリジナル缶バッジを７個セットで３名にプレゼント!
※絵柄はランダムです。





② 2名様 ファルコムショップ年賀状2019

年末年始にファルコムショップを利用した方に配られた特別な年賀状を２名にプレゼント。

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）までお送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.96プレゼント係

1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→
　（記事一覧から１つずつ）
3：アンケート①今年で15周年を迎える『軌跡』シリーズにひと言！
　アンケート②ファルコムjdkバンドライブに参加したことはありますか？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1：英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～
2：暁の軌跡最新情報
3：ファルコムニュース
4：英雄伝説 閃の軌跡 ～メンタルクロスリンク～
5：新久保だいすけイラストメッセージ

応募締め切り　2月26日（火）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。

異世界《ザナドゥ》に勇者よ再び！



も～っと集まれ！ ファルコム学園 ①

著者：新久保だいすけ
定価：本体900円＋税

学園生活を満喫していたが、全員が元の世界に戻っていった英雄・戦士達。しかし、再び彼らは伝説の桃源郷《ザナドゥ》へと帰ってきた！ 果たしてその理由とは!?
奇才・新久保だいすけが贈る、お待ちかねのシーズンⅡ、リスタート！

ISBN:978-4-8021-3138-4

FB ファルコムBOOKS

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル

フィールドワイ公式HPはこちら → www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら → www.field-y.co.jp/falcombooks



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.96

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社アクア
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/